

Factors associated with Drive for Thinness and Eating Disorder among Female Athletes

1K07A025-5 岩木 紫緒

指導教員 主査 岡浩一朗先生 副査 中村好男先生

【目的】

近年、若い女性の間で増加している摂食障害であるが、摂食障害には、一般的に拒食症と言われることも多い神経性食欲不振症と過食症と言われる神経性過食症の二種類があり、これらについての研究は多く行われている。しかし、一般女性と同様、痩せへの憧れに加え、減量などのストレスから摂食障害へと陥る危険性の高い女子スポーツ選手に関する研究は、これに比べ、多くはない。そのため、本研究では、神経性食欲不振症に焦点をあて、女子スポーツ選手における痩身願望と摂食障害傾向、またそれにおける要因について調べることとする。

【方法】

対象は、現在、ある特定のスポーツを日ごろ行っている18歳～22歳の、大学または専門学校に通う女子生徒（平均年齢20.18歳）であり、陸上競技10名、ダンス15名、フィールドホッケー15名、バレーボール14名、チアリーディング18名の計72名である。行っているスポーツの種類によって体重制限の有るスポーツ群と無いスポーツ群に分類した。調査の内容としては、アンケートにより、年齢、学年、身長、体重、EAT-26による摂食障害傾向、CDRSを用いた痩身願望の値の調査を行った。

【結果】

まず、体重制限の有無と摂食障害傾向の関係についてカイ2乗検定、体重制限の有無と痩身願望の関係についてt検定、摂食障害傾向と痩身願望の関係について一元配置分析を行った。その結果、どの分析においても有意差は見られなかった。次に、摂食障害傾向とBMI高低の関係についてカイ2乗検定を行ったところ、こちらも有意差は見られなかった。さらに、BMIの高低と痩身願望の関係についてt検定をおこなったところ、これには有意差がみられた。そして、これを体重制限別にもう一度同様の検定を行ったところ、ここでもやはり、体重制限の有無に関わらず、BMIの高低と痩身願望の値に

関するt検定のみに有意差がみられた。

【考察】

結果で述べたように、体重制限の有無と摂食障害傾向の関係についてカイ2乗検定、体重制限の有無と痩身願望の関係についてt検定、摂食障害傾向と痩身願望の関係について1元配置分析の3つを行ったところ、どの分析においても有意な差は出なかった。これらの結果から考えると、痩身願望の値を大きくし、神経性食欲不振症傾向を強める要因は、体重制限の有るスポーツを行っているか、体重制限の無いスポーツを行っているかには左右されないということが言える。さらに、痩身願望の値の大きさが大きくなることによって神経性食欲不振症の傾向が強まるわけでは無いという結果となった。上記3つの分析では、体重制限の有無を軸に分析を行ったが、4つめの分析では、BMIと神経性食欲不振症傾向について、カイ2乗検定、5つめの分析では、BMIと痩身願望についてt検定と、BMIを軸として分析をおこなった。するとBMIと痩身願望のt検定にだけ有意確立な差がみられた。これをもとに体重制限の有無に分けて4つめと5つめと同様の分析を行ったが、やはり、体重制限の有無に関係なく、BMIと痩身願望のt検定にだけ有意な差が見られた。これらの結果を総合すると、体重制限の有無によって3段階に分けられた神経性食欲不振症傾向の被回答者の占める割合に変化は無く、痩身願望の平均値にも変化は見られないという結果、さらに、BMIの高低による3段階の神経性食欲不振症の被回答者の割合に変化はなく、痩身願望の数値はBMIが高いほど大きくなり、それは体重制限の有無によって分けて分析しても同様であるという結果がえられたことになる。つまり、痩身願望のおおきさに影響を与えるのはBMIの高さであり、BMIの高さによって痩身願望は変化するが、それは神経性食欲不振症傾向の強度にまでは、影響を与えないということが言えることが分かった。